第１３３号

芥川だより

発行日＊＊＊２０１８年2月１日　e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 http:// akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2 －１４－3

TEL０７２－６８１－８８７０

＊＊＊＊＊＊＊＊ 一部1 ００円です ＊＊＊＊＊＊＊＊

微妙なリハビリ

私の悪い癖は単純に思い込み即実行することである。筋肉が壊れると言われれば、新たな筋肉を造ればいいのだと判断し無我夢中に運動を始める。幸いに自分はこの行動でかなり体力が回復しハーフマラソンも何とか完走出来るようになった。

その経験を認知症の義母にも効力があるだろうと思い我流の歩行訓練を始めた。９年目になる彼女は前かがみになり歩くのも危なっかしく、幾度もこけて救急車やタクシーの世話になっていたから、何とかこけないように、と思ったからである。

室内の廊下を使って歩行訓練を始めるとすぐに効果が出た。歩き方が楽そうになりふらつきが少なくなった。しかし、次の日になれば、また以前と変わらない姿になるから、訓練の方法を変えてみた。最初は簡単な柔軟体操をやってから歩行訓練をする。休憩を挟みながら幾度も繰り返す。童謡などを歌い、気を紛らわせて３０分ほど続ける。その結果、かなり体力が回復してきたが、問題が起きてきた。弱っていた時には、収まっていた徘徊願望が出てきたのである。「誰それと約束しているから、散歩に行かないといけない」と言い出してきた。

以前、介護施設の人が「あまり元気になりすぎるのも問題です、徘徊もあるし…」と言われていたことを思い出した。その言葉を聞いた時は、その言葉の意味が理解できなかったが、今になればよく分かる。認知症の人の体力の回復は、徘徊が出来ない程度の回復で抑えておいた方がいいのだろうか？トイレや寝起きが出来る程度で徘徊は出来ない体力？介護者が介護しやすい程度の体力の維持である。きわめて微妙なリハビリを続けなければいけないということだ。日によって人の体調には波があり判断しにくいのだが、そこを何とかクリアしなければならない。

寝たきりにはならず、徘徊をしない程度のリハビリが一番いいと考えても、それを義母に言うわけにはいかない。

「元気を出して訓練を続ければ、元気になってどこへでも行けるようになるで」と励ましながらデイサービスのお迎えが来るまでの少しの間、毎日やっている。

死をめぐるあれやこれ（41）

石川　吾郎

『アベノミクスによろしく』を推す

今回は、明石順平著（集英社インターナショナル新書）の、この本を紹介します。

「アベノミクスについては・・・概ね結果を出しているという論調が世の多数を占めているでしょう。しかし、客観的なデータを基に分析をしてみると、それが大きな誤りであることがわかります。この本を読めば、良い結果を出すどころか、アベノミクスが空前絶後の大失敗に終わっており、さらに出口も見えないという深刻な状況に陥っていることがよくわかるでしょう。しかも、その失敗を覆い隠すために、GDPが、算出基準変更に伴う改訂のどさくさに紛れて大幅にかさ上げされた疑いもあるのです。これはほとんどの人が気づいていないことです。

この本は、できれば全ての国民に読んでいただきたい本です。・・・現代日本の最大のリスクは「アベノミクス」なのです。」以上は、この本の「まえがき」からの引用です。そしてこの本は、この通りの本なのです。しかもわかりやすさを重視しマンガ『ブラックジャックによろしく』の佐藤秀峰氏のマンガ入りです。

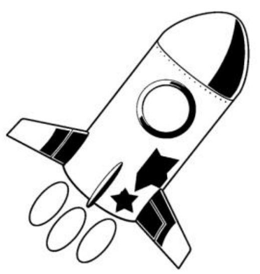
マスコミが報道しようとしない、安倍政権の身震いするような暴挙の数々が、この本の中で明らかにされていきます。「それでも絶望してはいけない」「現実から目をそらすな　立ち向かえ」というメッセージとともに・・・この国の民に将来にわたって貧困と不幸と悲惨をもたらすものが、まさに安倍政権のやっていることであり、これこそが「国難」だと、この本によってハッキリと見えてきます。

なお、この本は身近な人と一緒に読むと、より理解ができると思います。

芥川だより一三三号　目次

ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 47	坂本一光	2
哲学屋のつぶやき43	祖蔵哲	4
大峰奥駆道15	梵店主	7
おっちょこチョイぼけ 58	ＡＯ	7
大人の今昔物語	石川吾郎	9
我がおくのほそ道	成瀬和之	9
B級サラリーマン渡世譚	明石幸次郎	10
オクラの山たより	困了生	12
普通の話、大団円	大江雉兎	17
埋め草	C	19
女90年の軌跡	眞糀	20
俳句	土田裕 影山武司	20
編集後記	嘉	20



素老人☆よもだ帳（47）

坂本　一光

◆ときどきに輝く
—素老人校長、親に講釈する、の巻

保護者の皆さまには、本日は、授業参観から引き続いてＰＴＡ総会にご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。学校教育に対する日頃のご支援とご協力に対するお礼に合わせて、厚く感謝申しあげます。

それでは、この機会をお借りいたしまして、一言ごあいさつを申しあげます。

三年生ももうすぐ卒業し、この一年も無事に終わろうとしている今、改めて感じたこと、考えたことがあります。それは、生徒たちが、子どもたちが輝くということについてです。輝くと言いましたが、はっきり申しあげて、子どもたちはいつも輝いてなどいません。輝くのはときどきに、です。ときどきに、しかしドキッとするほどキラリと輝く。これが素晴らしいと思いました。

まず、日常の学習場面の中にもその輝きはありました。運動会やさまざまなスポーツ大会、あるいは文化的な催しなどの中にも、また、卒業式や入学式のような学校としての大きな儀式的行事の中にも、子どもたちの輝きが見られました。まっすぐに、前を向いているひたむきさが、子どもたちの輝きに表れている。そして、子どもたちのこの輝きに、親であれ教師であれ、大人はずい分と助けられている、と思いました。大げさに言えば、君たちに出会えて、君たちと一緒に生きていてよかったという思いです。

こういうときに、子どもに騙されてどうするのだ、という皮肉な問いもあっていいのですが、それに対しては、子どもに騙される大人は、子どもを騙す大人より遙かにましだという真実で答えたいと思います。

それはさておき、次に、それにしても大人が見落としているのでなければ、なぜときどきにしか子どもたちは輝かないのか。それを考えました。生活をする、今ここでこの時の人生を生きるということは、決して大人にとってだけでなく、子どもたちにとっても、実にこまごまとしたさまざまなことに、ほとんどはありきたりの普通のことに、よく対応しそれらを処理することです。そして、それは、本当に大事なことです。それを思えば、ときどきに輝く、あるいは、一瞬に見せる輝きは、むしろ逆にそれだけ意味深いものがあると思ったりしました。大人は、その輝きを汲みとらなければならない。

さらに、ときどきに、であれそれはどういうときにかと考えました。これは、一般的な言い方しかできませんが、子どもたちが、何の前提も条件も付けられずに、他の誰かと何かと比べられたりもせずに、そのままの自分がしっかりと受け入れられ、包まれていると感じられたとき、ではないでしょうか。あれこれと指図されるのではなく、どんな力をどんな風に発揮するか、黙って見ているよ、という場の中に安心して置かれているときのような気がします。大人は、もちろん、大人の責任としてそのためのさまざまな配慮や段取りをするのですが、それはあたりまえのことなので今は触れません。

次の詩のように、学校や大人は、子どもにとって一番星のような存在であるのが理想なのかもしれません。

いちばんぼし　　まど・みちお

いちばんぼしが　でた
うちゅうの
目のようだ

ああ
うちゅうが
ぼくを　みている

子どもたちが、生徒たちが、ときどきに輝く、それが、いまさらながらに素敵だと言いましたが、本当にドキッとするような、こんな詩がありました。作られたのは、昭和三十三年という時代である

こと、作ったのは、茨木のり子さんという当時三十二歳くらいの詩人であったことを申し添えて紹介します。

ぎらりと光るダイヤのような日

茨木のり子

短い生涯
とてもとても短い生涯
六十年か七十年の

お百姓はどれほど
田植えをするのだろう
コックはパイをどれ位焼くのだろう
教師は同じことを
どれ位しゃべるのだろう

子供たちは地球の住人になるために
文法や算数や魚の生態なんかを
しこたまつめこまれる

それから品種の改良や
りふじんな権力との戦いや
不正な裁判の攻撃や
泣きたいような雑用や
ばかな戦争の後始末をして
研究や精進や結婚などがあって
小さな赤ん坊が生まれたりすると
考えたり
もっと違った自分になりたい
欲望などは
もはや贅沢品になってしまう

世界に別れを告げる日に
ひとは一生をふりかえって
じぶんが本当に生きた日が
あまりに少なかったことに
驚くだろう

指折り数えるほどしかない
その日々のなかの一つには
恋人との最初の一瞥の
鋭い閃光などもまじっているだろう

〈本当に生きた日〉は人によって
確かに違う
ぎらりと光るダイヤのような日は
銃殺の朝であったり
アトリエの夜であったり
果樹園のまひるであったり
未明のスクラムであったりするのだ

こういう詩です。
『世界に別れを告げる日に
ひとは一生をふりかえって
じぶんが本当に生きた日が
あまりに少なかったことに驚くだろう』

詩人というのは、鋭いと言うか、深いと言うか、三十二歳やそこらでそんなことを言うか、と私にはこたえました。

三十二歳と言えば、私などは結婚して大阪に住んでいましたが、まだ就職もできない、オーバー・ドクターという学生の続きみたいな存在で、六歳と二歳の子どもを大学の行き帰りに保育所に送り迎えしていました。実験をし、論文を書く時間を削りながら（これは言い訳です）、こんなことをしていていいのかという焦りがあった。さすがに口には出しませんでしたが、心のどこかでは、『お父さんにはお父さんの人生があるんだ、泣くな、お前にかまっている暇はないんだ』と、自分の子どもに悪態をついていた気がします。それでいて、そんな生活の救いになったのは、よくある妻の愛情などではなくて（こんなこと言っていいんでしょうか）、『お父さんの人生なんか、知らんよ』とばかりに、実に無邪気に、ときどきに見せてくれた子どもの輝きだったと、今にしてやはりそう思います。

それから四年くらい経って、私は島根の大学に赴任することが決まり、社会人として初めて一人で立つことになりました。一人で行くのか、家族で行くのかを話し合ったときに、上の息子の言葉はまったく意外なもので、強烈でした。あっ、と思った。

「そんなん、お父さんの勝手や。毎日、京都の大学に行ってるのに、何で勝手に島根の大学に行くことにするんや」

父親がやっと就職できたとは、彼には思いもよらぬことだったのです。子どもには子どもの世界、子どもの人生があることをはじめて知りました。自分の子どもに、親としてというよりも、気持ちのうえでは、人間として向き合おう、それでいいのだと思いました。

余計なことを言いましたが、子どもたちは、ときどきにかもしれませんが、まっすぐなひたむきさを発揮し、確かに輝いてくれます。だからこそ、私たち大人は一緒になって、この子どもたちを、いつでもしっかりと包み込んでいてやりたいと思います。そのとき、大人も輝くのだと信じます。

保護者の皆さまには、今後ともご支援ご協力のほどを、よろしくお願い申しあげます。本日はありがとうございました。

（かたちは心であり、心はかたちになる
■大分の素老人）

哲学屋のつぶやき（43）

祖蔵　哲

意識を哲学する（二）

　先月は「意識とは何か」を勉強した。勉強といってものこのコラムは大学の授業ではないのだから無理に難しく説明しても、第一、読者に皆さんに読んでもらえない。ここがアカデミーと異なるところである。学会という世界はおかしなところで、一般の人に解るように説明すると返って反発される、いかにわかりにくい説明をしているかがキーになる。きっと秘密は簡単には暴かれないと思っているのだろう。冒頭から「つぶやき」になってしまったが、私達はわかりやすく今話題の相撲界の騒動を例に取り上げて「意識」の不思議を見てきた。その騒動の遠因は、現在（現実）の相撲が　本来の姿（本質）「日本の国技」としての「日本人のよき風習、習慣」「家族、社会」を失っているという事であった。なぜこの種のことが時々おこりになり、なぜそれが問題なのか。ここから「意識」の謎を解いた。それはこれがアイデンティティの問題とされるからであった。アイデンティティとは自己同一のことで、人間の最も重要な「私が私である」という「意識」の機能である。先の相撲の話は、今の私（現在の相撲）は本来的な私（よき日本の相撲）と違ってきているということとして読み替えられる。

一．「意識」は「現実を作り、現実を消せる」

　ご存知のように人間の細胞はどんどん生まれ変わり更新され入れ替わっている、昨日の私と今日の私は同じ私ではない。しかも、一秒前に経験した世界と今、この瞬間に経験している世界は同じではない。これら経験する世界も私達自身も同じではないのに何故「私」だけは同じで経験する世界は連続している、同じ世界であると認識できているのであろう。この不思議は最先端の脳科学でも説明できていないが、これが「自己同一」である。ひと昔まえに精神分裂病と呼ばれていた「統合失調」の「統合」とは少し違う概念である。統合失調症での「統合」とは思考や行動、感情を一つの目的に沿ってまとめていく能力、すなわち統合する「能力」と規定されているが、その「能力の低下」が主に「対人関係」の時に起こるとある種の幻覚、妄想、ひどくまとまりのない行動が見られる精神病態が現れるという。これは「社会的適合」の問題でもある。個人認識と社会現状現実とのズレはあって当たり前である。「健常者」でもこのような、ある目的に沿った、一貫した思考や行動をすることはできない。この思考や行動は「自己と社会」との一致という「目的」の結果の程度のことで、あくまでも「適応度」の問題であり「質」の違いではなく「量」の問題である。しかし、「自己同一」の方は「質」の問題である。再度「相撲騒動」に例えると、「今の私」が「現状の相撲」とするとどうも「今の私」が「これは自分じゃない」「本来の相撲」と違う「同じでないと「自己同一」を疑い始めた状況ということである。「意識」問題もここから始まりる。つまり「現状の相撲」は現実に存在している。これはだれでも認める。しかし「本来の相撲」というのはどこに存在しているのか、またしていたのか。だれも「それ」をもってこれない。このように「意識」は「現実にないもの」を創る出せるのである。

　そして、先月の最後には「ゾンビ」の話をした。あなたの周りの人と話してください。その時、貴方が今話している相手は本当に「人間」だと証明できますか。そんなの簡単だ、相手は怒るし笑う、もし手を切っていいという許可がとれればそこから血が出てくるし、心臓が動いている。残念ながらこれは何の証明にもならない。すべてそういう構造をもつ完全な「ロボット」つまり「ゾンビ」であれば。この思考実験は「意識」は「現実にあるものをなくせる」のです。先のケースと逆である。このように人間の「意識」は「現実（実体）」を「創ることもなくすこともできる」不思議な（物体「脳」？）である。

　私の「意識」が「現実」を作り出しそして「それが連続した自分の世界」だと「確信」し「その世界」は「他者や社会の世界」と多分一致しているだろうと「確信」して「生きている」、このような「私の意識の働き」が「世界」であるとは哲学者の考える世界のありようである。「哲学屋のつぶやき」「夢物語」に近いかもしれないが「現実」にはよく適合する「現象」が現れる。

二．「歴史的意識」の自己同一矛盾としての「明治一五〇年」

　今月はさらに「明治維新一五〇年」という「歴史的意識」の問題から「意識」の本質を考えてみたい。今年二〇一八年は、明治元年（一八六八年）から起算して満一五〇年の年に当たるという。思い出してみる、今年が一五〇年であれば五〇年前、明治一〇〇年は一九六八年であった。当時の日本は高度経済成長期でありその反動で世界的には経済、政治「外圧」を受けていた。そこで「明治百年を祝う」と題する五項目から成る祝賀主文では「近代国家建設」「国民の努力」「将来世代への期待」という三項目に加え「高度の物質文明が自然や人間性を荒廃させている現実への憂慮」と「過去の過ちを謙虚に反省」が述べられている。翻って見

て五〇年後の今年の内閣府による主旨文書は至極簡単ものになっている。冒頭には『明治一五〇年をきっかけとして、明治以降の歩みを次世代に遺すことや、明治の精神に学び、日本の強みを再認識することは、大変重要なことです』とあり、以下『近代国民国家』への取り組み、『大日本帝国憲法の制定』などの具体的事項がつづき『単なる西洋の真似ではない、日本の良さや伝統を活かした技術や文化も生み出された』とつづく。五〇年を経て前回の『二つの課題』がとても解決できているとは思われないが、それを無視し一五〇年前の「強さ」に帰れというわけである。高度成長で撲滅されたはずの貧困は格差として固定された「階級」を形成しているといわれているし、「原発事故」にみられる「技術不信」は無視され、「インターネット仮想空間」での新たな「技術」は確実に人心を蝕んできている。

「明治維新」とは何であったのか。この問題はこのコラムでも過去に述べた。日本という「歴史的意識」が「西欧近代」という他者の「意識」に向き合い、それを「適合」「統合」し、自己の「意識」に取り込もうとした「歴史」＝「記憶」である。明治の文豪夏目漱石は近代という「病」（近代統合失調症）にかかった一人であるが『現代日本の開化』でこう言っている。「西洋の開化は行雲流水のごとく自然に働いているが、御維新後、外国と交渉を付けた以後の日本の開化は大分勝手が違います。つまりは何でもない、ただ西洋人が我々より強いからである。しかも自然天然に発展して来た風俗を急に変える訳にいかぬから、ただ器械的に西洋の礼式などを覚えるより外に仕方がない。我々のやっている事は内発的でない、外発的である。これを一言にして云えば現代日本の開化は皮相上滑りの開化であると云う事に帰着するのである」。つまり、明治日本は強い西欧列国に押し切られた、自主的な改革ではないので「上滑り」している、これに対して西欧の開花は「自然に働いている」と言っている。この「自然に働いている」とはどういうことか。これは西欧近代化の歴史的発展段階のことである。いうまでもなく近代的西欧とは「近代的意識の発見」による「市民革命」「産業革命」である。「近代的意識の発見」とは、このコラムでも何度も取り上げている「デカルト的近代意識」つまり「自己意識」の発見である。「我考える、故に我あり」という自己を主観的と客観的にわけ、物と精神を分離した。これによって「科学」は発展し、「精神的権威」であった権力は市民へつまり多数の自己に帰属したわけである。しかし、明治日本ではこの歴史がなかった、そこで徳川「権力」は天皇という「権威」に戻され「権力」は旧「武士階級」「貴族階級」に温存された。この「権力」が「新たな武士階級＝士族」である「軍部」に移されたのが「昭和維新」から始まる日本の奈落の道である。結末は周知のとおりである。

日本の「ウヨク」とよばれる保守陣営の「発言」は幅広い。しかし論点は唯一つである。それは「自己同一」のための「権威と権力」行使である。端的に言うと、「自己＝日本国」を「統合＝同一」する「行為＝権力」の根拠を「権威＝天皇」に置く。すなわち自己の本質は「権威」ということになる。しかしここで考えなければならないのはそもそも日本国の本質は具体的構成である「人間」ではないだろうか。本来の本質が人間であれば「権威」は「一般人間」「市民」になるはずであろう。ここに彼らの論理的矛盾もあるし「意識」としての矛盾もある。「適合不能」で統合失調症になると思われるのだが、彼らの頭の中はどうなっているのかは知る由もない。そうならない「保守系」国会議員などの回答は「天皇がいるお陰で日本国はまとまっていられる。この権威がなくなれば国は混乱する。不純は排除しなければならない」この程度である。さて、ここでさらに保守主義者と呼ばれる人々が「家族」を持ち出してきていることにも触れたい。この「家族」というものも「権威」の一つの「現れ」である。彼らの「昔はよかった」での「家族」とは、たいてい「自然共同体」での「家父長制度」に基づく父親、長男という「儒教的権威」と「権力」が一体となった固定観念「意識」である。この「個人・家族 - 共同体」の上に近代国家を乗せるとそのまま「絶対支配機構」が出来上がる。つまり、個人の心「意識」の中に「介入」するのは困難だが、共同体にそして家族にこの「意識」を同化させるのを狙うのである。共同体の方はすでに「自然共同体（ゲマインシャフト）」から「利益共同体（ゲゼルシャフト）」に移行しているので次は家族というわけである。

重ねて保守論者の論理誤謬を探すと「よき家族、よき故郷、自分の生まれた国を愛するのは良いことだ」「だから親を敬い、共同体の掟を守り、国家に忠誠を誓うべきである」というテーゼもある。これはよくある「べき論」である。すなわち「そうである」ということが「そうであらねばならない」とにはつながらないということである。現代の個人は「自由」を普遍的価値に置いている。自由とは他から強制されることがないということである。「べき論」は個人の「多様性」「自由」を「国家の意思」従属させるものであり人間的価値に反するものである。これが「べき論」という論理的誤謬を使って説明するところに自己矛盾があるが、我々の方もこれに気がつかない。これも問題

である。

三．「意識」が生み出す「仮想通貨」

さて、「明治」が遭遇した「西欧近代」は先ほどの述べた「個人‐共同体‐国家」を覆う「意識」「精神」のあり方であったが、もう一つは「技術」である。これは「意識」とどのような関係にあるのか。冒頭でも説明しているように人間の「意識」は「現実にないもの」も作り出せる。つまり、「技術」とは今ないものを新たに作り出せるということである。そしてこれは実体的「物」には限らない。つまり触ってたり、感じたり出来ないものを「物」と同じように作り出せるのだ。難しい用語ではこれを「物象化」というが、わかりやすく言うと「こと」を「もの」にできるということである。これでも解りにくいが、「動詞」を「名詞」にして一般化できるということになる。もっと平易にいうと、私が何か小説を書くとする。「書く」ということは「動詞」であり、「私が書く」というのは「個人的なその時の行為」である。しかしこれが「本」になるとその行為「動詞」は物「名詞」になる。「小説本」として出版されると広く読まれ一般的になる。私の特殊な行為が物となり交換され一般化するのである。ここに（行為／物）と（特殊／一般）の関係が成立する。これを可能にするのが人間の「意識」である。さて、この「物象化」の現在の究極の姿が「仮想通貨」に現れている。

最近の新聞記事「仮想通貨交換業者コインチェックから五八〇億円相当の仮想通貨「ＮＥＭ（ネム）」が流出した」。これが事件であるかどうか、なにが「事件」かどうか普通の人には解らないだろう。「昨夜、コンビニから五八〇万円盗まれた」であれば誰でもわかる事件である。まず「仮想通貨」とは何か、「流出した」とはどういうことかが解らないとどうにもならない。ここではこのことに詳細に解説するスペースもないし、専門的に解説してもそもそもその本質が理解できるかあやしい。なぜなら「仮想通貨」を運営している人々自身がその本質を理解しているかどうかも微妙であるし、ましてやこれに参加している人々は解っていない。いや「意識」は二つの異なる「同一」をそもそも持てない。

「仮想通貨」は「仮想」といっているが本質（実体）は普通の「通貨」であり「日本円紙幣」「ドル紙幣」と同じである。そもそも「紙幣」とはすべて「仮想」である。「仮想」とは「実体がない」ということである。一万円札はただの紙に一万円と書いてあるだけである。そう、思いだしていただきい「実体がないもの」を現実（実体）化させるものは「意識」。「紙幣」「通貨」とは「意識」が作る「現実」である。ではなぜこの「仮想」「現実」を皆「確信」するのか。その根拠が「確信」である。「確信」とはあくまで「確信」であり「現在こうであるから将来もこうであるべき」「期待」「思い込み」「信仰」とだんだんと「怪しく」「不安」になるが「共同幻想」である。「日本」「アメリカ」は消滅しないだろうという「信用」「確信」でこの「仮想」は「実体」として存在する。しかしそれが「現実に実体化」するのはその紙幣を交換により「物」や「こと」に変えてその価値を「消費」「経験」することにある。ただ「紙幣」を持っているだけではそれは「実体」ではない。現実の「通貨紙幣」はこれが目に見える日常行われている。しかし、「仮想通貨」はこの日常が「仮想空間」で行われるところに特徴がある。

「通貨紙幣」の「信用」の基本単位は「国」である。しかし、「仮想通貨」の「国」は「ネット空間」であるため「国」という概念はない「国境」もない。では「信用」の根拠が国でなければなによるのか。「仮想世界」といってもさすがに「信用」の根拠まで「仮想」には出来なかった。「信用」の根拠は「仮想」ではなく「現実の経験」である。これが「承認行為」とよばれる「仮想通貨」の「基本ルール」であり「信用」「確信」を支えている。つまり「承認行為」とは「仮想通貨」が交換され現実のものに「いつ、どこで、誰が、何に」なったのかという「現実」を「記録」する行為である。この「承認行為」自体に報酬は支払われる仕組みである。しかしこの行為は簡単ではない、多くの人間的「労力」とコンピュータの電力を「消費」する。「仮想通貨」も人間の「意識」が作り出したものであるがその「意識」自体も「意識」だけで存在することは出来ず現実の「身体」が必要であることを示唆している。「意識」は現実を作り出すが　その作られた現実は意識だけでは現実存在とならず必ず「身体」「感覚」「経験」が必要であることがわかる。映画などでよく見られる「脳」だけが浮かんでいる「意識」というものは不可能ということが理解される。

さて、今月も「意識」が創る「現実」の話を、現実の話題を取り上げすすめてきた。しかしまだまだ「謎」は深まる。「私が現実なのか」「現実が私なのか」～つづく。

大峯奥駆道（15）

梵店主

雪が舞う大峯山寺を後にしてテント場である小笹の宿へ向かう。道は一気に細くて急な下りになる。かなり下って四〇分ばかり歩くと非常に気持ちの良い所に着いた。小笹の宿である。小さな小屋が建ち、その近くに勢いよく流れる水場があった。周りを見渡すとテントが四張りほど見える。ということは、もうすでに小屋は一杯で泊まる余地はないことを物語っていた。この避難小屋は四人が定員とガイドブックには書いてあったからである。

少し標高が下がった為に雪が止み簡易テントで今晩寝る身にはありがたい天気ではあるが、寒さは厳しくなってきた。

テントを建て、水を汲みに行き高ちゃんが先週韓国で買ってきてくれたラーメンを食べる。ピリッと辛く体が温まる。冷たい酒は寒いので少しか飲めず、とにかく寒いので早々にシュラフに潜り込む。幸いにも風がなく雪も降らなかったが、シュラフでの寝心地はよくない。たびたび起きては外で煙草を吸う。高ちゃんは、よく寝ている。うらやましい限りだ。私は、あまり熟睡できないタイプの人間だから仕方がない。

眠れないから翌朝の三時に起きだし、もっと寝ていたい高ちゃんを起こす。私の悪い癖である待てない性格なのである。暗闇の中ラテの灯を頼りにアルファー米でおじやを作って食べた。

食事が終わるとトイレがしたくなりテント場から離れた草むらで用をたす。なにか申し訳ないようなきれいな草地で灌木が所々に横たわっていた。神々の神聖な雰囲気を感じるところでトイレをするのは気が引ける。山登りをしていて何が問題かといえば、それはトイレである。

私が、なんともやるせなくなり目を覆いたくなったのは、夏の剱岳である。岩登りの人たちが集まる三の窓という剱岳の北方稜線にあるコルはひどかった。両側を岸壁に囲まれた石と砂地で草もなくテントも四張りぐらいしか張れない場所の一角に落とし紙が散らばっている箇所があった。ポン場である。いくつもの大便の山があった。大雨が降れば流されるのだろうが夏山での雨ぐらいでは流されて無くなりそうにはないほどの量である。冬になって積もった雪の力で池の谷に流れるまで待つしかないのだろうと、その時に思ったが、山の素晴らしさがいっぺんに吹き飛び暗い気持ちになったことを思い出した。

ポンが終わり急いでザックに荷を詰めて歩き出すが、荷物の重さは少し重くなったように感じた。朝露や湿気が用具に付いたからである。

小屋の横に来た時に大きな仏像が目に入った。真言宗の僧である聖宝・理源大師の銅像である。平安時代に一時すたれていた奥駆道を再興した僧である。この聖宝さんは、醍醐寺の開祖であり、今も続く当山派修験道の祖と言われている人である。

言い伝えでは、山に住む大蛇を退治して奥駆道を切り開いたという。私の邪推では山上ケ岳への多くの参拝者を狙った集団がいたのではないかと。もう少し推察すれば大峯山寺の反主流派がこの小笹の宿に本拠を構えていたのではないかといろいろと想像する。

大蛇は悪い代名詞だが、蛇ではなく人であり、それは悪人ではなく時の権力者に敵対する人々のことだったのではないかと推測した。およそ、歴史は勝者の作ったものであって、敗者の歴史は抹殺されてしまうのが古今東西の歴史であって本当の歴史なんかは無いのである。あくまで歴史の断片を創造的に描いたのが歴史書であるというのが私の考え方である。

例えば、役の行者が実在した人物だとしても、実際の人物とはかなり違った脚色が後世されて伝えられているとはずである。人の能力にはそれほど差はない。一人では何もできない。多くの先達や協力する人たちがいなければ、何もできない。しかし、歴史は、それら多くの人たちの考えや行動を闇に埋もれさせ一人の英雄を創り上げてしまう。スーパースターが好きなのである。私は、埋もれた人の歴史を想像しながら考えるのが好きなのである。

おっちょこチョイぼけ（58）

――昭和女、どっこい日記――

気のいい、変なヤツ、Ｙ子…の巻

Ｙ子は親友Ｆ子の親友だ。親友の親友なら、親友ではないかと思われるかもしれないが、それは微妙に違う。仕事が違うということもあるが、Ｙ子と二人だけで会うことは滅多になく、今回もそうだが、Ｆ子を通してＹ子の行動を知ることが多い。でも、そのたびに思う。「Ｙ子って、いいヤツ！　だけどちょっと変」。

先日、Ｆ子は姪っ子の結婚式に着るあらたまった洋服を買いに、Ｙ子を誘って梅田へ行った。

「結婚式といっても、ごく小規模で、花嫁側はうちのお姉ちゃんとこ一家と私だけ。お婿さんの方も、そんなに多くないと思うんで、まあお葬式で言うたら、『家族葬』みたいなもんやわね」とＦ子は縁起でもないことを言っていたが、それでもホテルでやるちゃんとしたお式なので、Ｆ子もそれなりの礼服を用意しようとしていた。

その買物の同行を引き受けたＹ子は当日、やたらに大きな紙袋をさげて、待ち合わせ場所に現れたという。「何、その荷物？」と聞くＦ子に、「うん、ちょっとな」とＹ子。「この後、どこかに寄るつもりなん？」と続けて聞いても、「いや、ちょっと…。私物やから、気にせんといて」とワケのわからないことを答えて、Ｙ子は

そのデカイ紙袋を持ったまま、阪急百貨店、ルクア、阪急三番街の洋服売り場をF子のお供でさまよった。

既に冬物バーゲンは終わっていたので、売り場は比較的すいていて、じっくり見ることができたそうだが、礼服にもなって、仕事のときにも着られるような、という衣裳はなかなか見つからなかった。

「いろいろあるねんけど、コレ！というものがなくて」とF子。

わかる！　しかし、F子には悪いが、それすべて、私たちの年齢のせいなのだ。梅田や難波で売っている服の多くは若者向きだ。十代、二十代、三十代…せいぜい四十代ぐらいまで。もちろん、中高年向きのブティックもたくさんあるのだが、F子はそういう店は眼中にない。無意識にスルーしてしまう。生まれつきほっそりしているので、中年体型用に作られた服など見向きもしない。柄ものもF子は着ない。

さらに、F子には悪いが言わせてもらえば、「お金にいとめをつけなければ、買いたい服などナンボでもある」のである。大阪きっての繁華街、梅田にはほかに大丸もあれば、改装中とはいえ阪神もある。ディアモールだか、HEPナビオだか、グランフロント大阪だかその他、洋服の店が入っている商業施設がひしめいている。

しかし、結婚式に招かれることが、この先何回あるかを考え、その一回ぽっきりかもしれない結婚式も内輪だけとなると、「う〜ん、どうしようか」ということになるのは当然だ。そんなこんなで歩きくたびれた二人は、お好み焼き屋に入った。ビールやらお好み焼きやら焼きそばを食べ終わったとき、Y子がキョロキョロ周りを見て、やおら着ていた服を脱いだかと思うと、持ち歩いていたデカイ紙袋から何か取り出して、それを着始めたという。

F子によると、「びっくりしたで。Yちゃん、急に自分が着ていたものを脱いで、着替え始めるねんもん」。

前はお好み焼きの鉄板。後ろは、低めの仕切り板。その状況で、Y子が着たのは、自分が数年前に知り合いの結婚式に招かれたときに購入したという礼服。

Y子は言ったそうだ。「Fちゃんが、気に入った服を見つけて買うていたら、こんな私の古い服、出すつもりなかってん。新しい服の方がええに決まっているから。しやけど、服って、探したら案外、うまいこと見つからんもんやから、一応、持って行っとこと思てん」。恥ずかしそうに言うY子が着て見せた服は、銀色だかブルーだかで、礼服専門のブランド品。およそY子が探している服のイメージとは違っていたが、F子によると「Yちゃんが着て見せてくれたら、なんかいいやん！と思ってん。これを借りて、下に着るブラウスを買うたら、私にも似合いそうやと思って」。

Y子は、一回しか袖を通していないというサーモンピンクの一張羅のボレロも一緒に持って来ていて、やっぱり恥ずかしそうに「フランス製やって言われて買うてん。しやけど、タグ、日本語で書いてあるねん。フランス製ってありえんやんな（笑）」。

ピンクの上着の方は似合いそうにないということで、辞退したそうだが、Y子ががっかりした様子だったので、慌てて、「Yちゃんがエエねんやったら、両方、借りとく」と言ったら、Y子は心から嬉しそうに笑って、「そお？　こっちは新しいから、よかったら、着てや〜」と言ったそうだ。Y子、いいヤツである。

いいヤツだから、人の言うことを疑わない。台湾に行ったときに、天珠(てんじゅ)とかいうネックレスを店の人に勧められた。宇宙のエネルギーが詰まった天然石で、肩こりに効いて、持っていたら健康になり、金運もよくなるというそれを「八万エン、日本円でOKヨ」と言われ、つい「私、いま五万円しか持ち合わせてないんで」と答えたら、「五万エンでOKヨ！」と返され、つい買ってしまったそうだ。

「これ、肩こりに効いているような気がせえへんねん。試してみてくれへん？」とY子に言われて、まず肩こり症のF子が借りて試したが、「効果、ようわからへん…」。肩はこらないが、ひそかに金運を高めることを期待した私も借りてみたが、天珠が重くて肩がこったような気がしただけだった。

Y子は効果がないことよりも、「あのとき、三万円しかないと言うてたら、絶対三万円やったワ。いや、一万円しかないと言うてたら、一万円でも買えてたんちやうかな」としきりに言っていた。一万円でも買わない方がよかったということだと、私なんかは思うが。

そのほか、Y子が知り合いたちのために、必死でいろいろやっていることを私もF子もよく知っている。ときどき、こちらにもお鉢がまわってくるからだ。署名運動のときもあった。（正直、二十人集めるのに、結構、苦労した。Y子が喜んでくれたので、まあ私も嬉しかったが、内心「自分の知り合いの人数分だけ引き受けて！」と叫びたかった）。独立して商売を始めた知人の店の売上に貢献する、ということもあった。「それは、ちょっと…」と思ったが、Y子が半泣きのような声で、「Hさんが困ってはって。どうしたらええんやろ？」とか言われたら、「じゃ、私もひとつ買わせてもらおか」と言わずにおれなかった。非常に迷惑。でも、Y子がいいヤツなんで、つい、喜ばせたくなってしまうのだ。

Y子、面と向かっては言いにくいが、お願い、いいヤツもほどほどにして！

（AO）

大人の今昔物語（42）

石川　吾郎

今回は、千年前の都のワイドショーネタ。いつの時代も人々はこういった事件やゴシップが大好きなのだなぁと、つくづく感じます。教科書に出ない度は三／五。

名僧ぶった僧が人の家に立ち寄り殺される話し（巻第二十六　第二十二話）

今は昔、京の都に名僧のふりをして、人に招請されてはそちらに赴いて、世を渡る僧がいた。

ある時この僧、さる所から請われて祈祷を頼まれたので、喜び勇んで出掛けようとするが、車を借りることができなかったので、徒歩で行くことになった。しかし法服をまとったままで行くのは距離が遠く、てくてくと歩くのは見苦しいので、普段着の衣で平笠などを着けて、法服を袋に入れて従者に持たせ、その依頼の場所の近くに小家を借り、法服に着替えて行く、という段取りにしようと考えて出掛けた。

さて、目的の家の向かいにあった小家を借りようと、しかじかと訳を説明すると、その若い女主人が「さあさあどうぞ」と、招き入れてくれる。

客間と思われるのが一間あり筵が敷かれている。招かれるままに、この僧はそこで法服に着替えようと入っていく。

ところが、この家は若い女主人が僧の間男をもっていたのだが、この女の実の夫である雑色が、これを伺おうと外出をするふりをして、隣家に身を隠して覗いていたのだった。そんなことはつゆ知らず、僧がこの家に入っていったので、夫は、此奴がそうだと、ただちに家に戻った。夫、僧が居るのを見つけ、大路からずんずん家に入り、妻に「手前、ウソを突いていたな」と問いつめると、女「あの坊さんは、お向かいのお屋敷に頼まれ法要をするのに、法服に着替えるためにここに立ち寄っただけのお人」と言い終わらないうちから、この男、刀を抜いて走り掛かり、この僧を捕らえて身体の真ん中を刺した。

僧は不意を突かれ、手を上げて「これはどうしたこと」と言うが、抵抗する力もなく、刺されて仰向けざまに倒れた。妻「まあ、どうしましょう」と、僧を介抱しようとするが、なすすべもない。

男は僧を刺してそのまま、走りでて逃げてしまう。僧に仕える小童が脇にいたが、その童がようやくの思いで表の大路に出て、「人殺し！」と、叫んで騒いだので、犯人の男は人に捕らえられた。

僧は刺されてしばらくは生きていたのだが、まもなく死んでしまった。家から人が出てきて、犯人の男を検非違使に突きだした。その後この男は尋問され、投獄された。実に、たわいのないことで、三人が人生を台無しにしたものだ。これも前生の報いのいたすところであるだろう。

＊　＊

但し世の人、上も下もよく知らぬ小家などには、うかうかと無用に立ち入ってはならないものであって、このように思いも掛けぬ出来事にも会う羽目になるものだと言い合った。

ゆめゆめ止めるべき、と語り伝えていることだとか。

《コメント》

この事件は、恐らくその性格上、京の口さがない都人の恰好の噂話しとして、流布されていたのではないかと、思われます。それを『今昔』の編著者が拾って載せたのでしょう。

その時代に現代のワイドショーがあったら、こんなふうに伝えられるだろうな、と想像ができてしまいます。

なお「検非違使」は平安時代の警察的な役割をしていました。

我がおくのほそ道の旅（13）

成瀬　和之

露通も敦賀の港まで出迎えに来て、美濃の国（岐阜県）へと同行した。馬に乗って大垣の町に入ると、曽良も静養先の伊勢（三重県）から戻ってきた。越人も馬を飛ばして駆けつけ、みんなは如行の家に合流した。前川子や荊口父子、その他親しい人たちが、昼も夜も訪ねて来て、生き返った死人に会うように、私の無事をよろこび、ねぎらってくれた。

けれども、長旅の疲れもまだとれなかったが、はや九月六日（陽暦一〇月一八日）になったので、伊勢神宮の遷宮を拝観しようと、再び舟に乗って、

蛤のふたみの別れ行く秋ぞ

蛤のふたと身が別れるように、私は見送る人々と別れて、二見が浦に出かけようとしている。ちょうど晩秋の季節がら、離別の寂しさがひとしお身にしみる。

「おくのほそ道」(全)角川ソフィア文庫ビギナーズ・クラシックス日本の古典

長谷川櫂氏は、NHK100分de名著「おくのほそ道　松尾芭蕉」で次のように書いています。

人間の世界にはもちろん喜びや楽しみもたくさんありますが、それ以上の悲

しみや苦しみが控えています。その最たるものが親しい人々との別れです。

（中略）

　こうした別れの悲しみや苦しみに満ちたこの世界を人はどのように生きていけばいいのか。これが『おくのほそ道』第四部の旅をしながら芭蕉が問い続けていたことです。その自問の果てに芭蕉がたどり着いた回答が「かるみ」でした。では「かるみ」とは何なのか。

「かるみ」とは一言でいえば悲惨な世界を軽々と生きてゆくということです。すでにみたとおり芭蕉は第三部の旅で不易流行という考え方にたどり着きました。不易流行とは宇宙はたえず変化（流行）しながら、じつは不変（不易）であるという宇宙観でした。それは同時に自然観でもあり人生観でもあります。時の流れとともに花や鳥も移ろい、人も生まれて死んでゆく。その花や鳥や人もまた不易なるものが時とともに流行する姿なのです。

「かるみ」とはこの不易流行という認識の上に立った人生の生き方、つまり行動論なのです。人の世が出会いと別れを繰り返しながら、そのじつ何ひとつ変わらないのであれば、出会いや別れに一喜一憂することなく、不易に立って流行を楽しみながら軽々と生きていきたいという芭蕉の願いなのです。

（中略）

「蛤」の句、私はこれから舟で伊勢の二見が浦へ向かうが、君たちとの別れは蛤の身が蓋から引き裂かれるようにつらいというのです。「ふたみ」に蛤の蓋身と二見が浦をかけています。内容は重いのですが、言葉は軽々としている。これを旅立ちのときに江戸の門弟たちとの別れを惜しんだ、

　　行く春や鳥啼き魚の目は泪

この句と比べると、「蛤の」の句のほうがずっと軽やかです。二つの句を並べると、『おくのほそ道』の旅で芭蕉が最終的に得たものが何であったかがよくわかります。

　芭蕉は元禄七年（一六九四年）初冬、大阪で亡くなります。古池の句から八年、『おくのほそ道』の旅から五年後のことです。しかし芭蕉の晩年の八年は豊饒な歳月でした。

（中略）

　芭蕉が『おくのほそ道』の旅を終えて都に上るや否や、芭蕉の俳句は一変した。それは芭蕉が『おくのほそ道』の旅から「かるみ」を持ち帰ったからです。「かるみ」こそが『おくのほそ道』の旅のいちばんの旅みやげでした。

　約一五〇日間、約二四〇〇キロに及んだ芭蕉の「おくのほそ道」も、いよいよ終着。大垣が終点です。なぜ大垣が終点なのか？大垣は江戸以外で早くより蕉風俳諧が花開いた土地で、蕉門発展の歴史上で、画期的な意味を持つ土地です。芭蕉も出立前より大垣を結びの地と決めていました。芭蕉と親交の深かった谷木因宅跡に、二〇一二年四月「大垣市奥の細道むすびの地記念館」が出来ています。二〇〇インチスクリーンの３Ｄ映像が大迫力で、俳人で名誉記念館長の黛まどかさんが芭蕉の旅を、わかりやすく解説してくれます。また、大垣市内に整備された約二キロの「ミニ奥の細道の旅」が楽しめます。歩いてもよし、記念館で無料レンタル自転車を借りて自転車でめぐるのも良いです。

「おくのほそ道」の世界は、「行く春や」「行く秋ぞ」の二つの句を底辺とし、「平泉」の章を頂点とする三角形の構図としてとらえることができます。「我がおくのほそ道の旅」は続きます。江戸深川から平泉を目指して。その前に、次回から、松尾芭蕉の誕生と死にまつわる土地を訪ねましょう。

B級サラリーマン渡世譚（55）

明石　幸次郎

担当者の役割‐韓国編

　明石は、会社に入ってから、営業という立場で仕事をするのは、初めてである。入社以来七年間、購買マンとして、多くの営業マンと、売り込み、価格、納期、クレーム交渉、その他の折衝を経験して来たので、営業マンとはどうあるべきかは、買う側の立場で考えさせられてきた。又、先輩、上司からも、資材から見た営業マンの評価をあれこれと、聞かされていた。

　概ね、購買マンから見る評価の高い営業マンは、①はったりのない誠実な対応、②駆け引きしても大きなブレがない、③一度決めたことは、精一杯努力して約束を守る、④饒舌でなく、こちらの立場も考えながら話が出来る、⑤特に用事がなくても訪ねてくる、⑥問題が発生しても誠実に対応して逃げない、⑦難しい話をしても爽やかな感じを与える、⑧自分の会社、仕事に誇りを持っている、⑨スーツ、作業着などの服装に清潔感を感じさせる、⑩どことなく愛嬌がある、などが上げられていた。

　明石が勤務していた本社資材部、堺工場の資材課でも、何人かは、及第点が付く営業マンがいたので、自分が営業の立場になった今、そのような営業マンに近づきたいと思うようになった。

国際電話で韓国側と交渉しているK田部長は、当に明石のイメージしていた優秀な営業マンそのものである。

K田部長は、自分の話しを終えると相手の鄭常務の主張を尤もと頷きながら充分に聞いた。そう上で「常務の製造本部長としてのお立場は、我々として、納期を早めることで、守ります。今度は、私共の営業としての立場をお考え下さい。それで来週水曜に、工場から来た明石という若手の担当者が、私の希望を伝えに、ソウルに参りますので、宜しくお願いします。」と言って、相手の応答を聞きながら、「それは、驚くような数字ではありません。明石は工場にいましたので、同じ物作りの立場でお話しさせて頂きます。具体的には、あと五パーセントを少し超える単価見直しを説明致しますので、これを常務にご納得頂き、認めて頂きたいのです。ハッハッハー常務にとっては、小さな数字かも、知れませんが……まあ、明石の話を聴いてやって下さい」その後、又「ハッハッハッー次回はH川と参りますので、今回は、若手教育の積りで明石を鍛えてやって下さい。専務のSからも常務に宜しくと申しています」と輸出部長として言うべき事を伝え、その後に鄭常務の旧知の名前も出して、国際電話での話を手短み終えた。

前の座って聞きていた明石に「まあ、明石さん、そう言う事や！大変やが、担当者の君は、韓国に対する我社の大使や。君に全権を渡すので、少しでも値上げして来てくれ。それが、この部を発展させることにも繋がる。思い切ってやって下さい。A杉課長、これでエエかなぁ～」と最後は、A杉課長に話を向けた。

A杉は「部長、それでは、来週水曜日から出張させます。明石、鄭さんを説得する資料作りを明日まで作れ！資料作りは、G本嬢に手伝って貰え。俺からも頼んでおくので、エエなぁ～」と明石の顔を見ながら、またもや命令調で言った。

K田部長は「明石さん、資料は、ストーリーが無かったらだめや！明日、終われば、筆下しに北新地に飲みに行こう。五時一五分の終業チャイムがなったら、直ぐに、タクシーで四ツ橋筋が込む前に出よう」と、にっこり笑って話を終えた。

A杉は課長席に戻ると直ぐに「G本ちゃん、今日の一〇時から明石の資料作りを手伝ってやってくれるか？明日夕方までに、韓国との交渉の資料作りをやり終えなアカンのや～」と優しく指示をした。G本嬢はにっこりと頷いて「分かりました」と言ってから明石の方を見て、「明石さん、お手伝いを致しますので、何でも言って下さいね」と、きりっとした清楚な顔を明石の方を向けて言った。

やれやれ大変なことになったが、賽は投げられたのだから、やらないと逃げるわけには行かないと、腹を括りかけた。しかし、気になったことがあったので、隣に座るN川に「N川君、今、K田部長が、出張前に筆下しに北新地に行こうと誘われたのだが、筆下しとはどういう事なの？」と質問したら、N川は「ハッハッハッー！K田部長は、初めて海外出張する部下に対し筆下しと称して、北新地の美人ホステスがいる店に連れて行って、飲ますのですよ～それも、一軒だけではないですよ。二～三軒は、覚悟されてた方が良いですよ。まあ、帰るのは深夜で、タクシーですよ。頑張って、美人ホステスと楽しんで下さい」と応えてくれた。

そんな事か、それも仕事の内かと思いながら、部長と美人ホステスに気を使うぐらいならば、資料作りを手伝ってくれるG本嬢と終わった後、お礼と称し、二人で食事をした方が、余程楽しい時間が過ごせるのに、と内心思った。

机を挟んで迎に座って居るT村さんが、「明石君、行き成り大変やなぁ～、向こうへ行ったら、大変やで！値上げなんか無理やろ。決まりかけた価格を見直して、それに上乗せは、しんどい話やなあ～Mちゃんどうやねん？」とM居に質問した。

「まあ、社内事情の流れで値上げは五パーセントでは、駄目やとなってしまったんや。それを新しい担当者に五パーセント以上、上げて来いと出張させるのも可哀想やで！」と二人は明石の立場に同情してくれたが、明石は内心少しも嬉しくはなかった。

部の方針として、自分が来週行って何とかして来ないと、自分自身の立場がない。自分なりのストーリーを作ることが、先決だと思い、G本さんを呼んで「悪いけど、本館の五階に資料室があるので、去年と今年の日銀が出してる卸売物価統計と、野村証券が出してる野村週報を去年の七月頃からのを借りて来てくれますか？」「はい、分かりました。そんな資料室なんかあるのですね？知りませんでしたわ」

「ええ、輸出部の人は、余り利用したことがないんですね。海外業務部が揃えた各国のデーター、文献、関連資料何か結構あるので、私が以前、本社資材部にいた時は、することなかったら、勉強と称して、図書館に行くようにそこに入り浸ってました」「へー。会社も面白い所があるのですね。今から行って、借りて来ます～」と言って取りに行ってくれた。

オクラの山たより（17）

困了生

以前、この「オクラの山たより」で書いたことだが、日本の古典文学の中で最も有名な悪口雑言は何といっても紫式部がその日記の中で記した清少納言への酷評であろう。

（一）

清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人。さばかりさかしだち、真名書き散らして侍るほども、よく見れば、まだいと足らぬこと多かり。

かく、人に異ならむと思ひ好める人は、必ず見劣りし、行く末うたてのみ侍るは。艶になりぬる人は、いとすごうすずろなる折りも、もののあはれにすすみ、をかしきことも見過ぐさぬほどに、おのづから、さるまじくあだなるさまにもなるべし。そのあだなりぬる人の果て、いかでかはよく侍らむ。

清少納言ときたら、ドヤ顔でとんでもない人だったようですね。あそこまで賢ぶって漢字を書きまくっていますけど、よく見ると、その学識の程度もまだまだ不十分なところばかり。

彼女のように、好んで人と違っていたいとばかり思っている人は、（最初は新鮮味があっても）そのうちに必ず見劣りし、行く末はただ異様なばかりになってしまうものです。（清少納言のように）風流を気取りきった人は（人と違っていようとするあまり）とても寒々として風流とはいえないときでも「ああ」と感動し「いいわ」と思うことを見逃さないので、そうしているうちに自然に（普通の人の感じ方から離れてしまい）的外れで中身のないものとなっていくでしょう。その中身のなくなった人のなれの果ては、どうして良いものとなりましょうか。悪くなるに決まっているわ。

ここで紫式部は清少納言を、得意げな顔をして浅薄な漢才をひけらかし、その上、人と異質であることを好み「あだになりぬる人」すなわち格好だけでまったく中身のまったくない人間であると酷評している。おまけに末尾の一文では清少納言の零落を予言するなど、その書きぶりは水に落ちた犬をさらに打たんばかりの徹底ぶり。それにしても強烈である。なぜ彼女はここまで清少納言を否定したのだろうか。

現在までに専門家によってその理由はいろいろと考えられてきた。いくつか例を示せば、たとえば今井源衛氏は「昨日まで宮廷に女流文人としての名誉を争った先輩に対する対抗意識の露出」つまり自分と同類の才女に対する紫式部の「清少納言なんか、どうだっていうのよ」という敵愾心（てきがいしん）からだという。

また別の研究者は紫式部の夫が「枕草子」の中で悪く書かれた報復のため、とも主張している。問題となる記述は「枕草子」一一九段「あはれなるもの」。ただし紫式部の夫である藤原宣孝のことは「これはあはれなることにはあらねど」と「お題」である「あはれなるもの」からはずれておりますよ、とわざわざ断って記されている。内容は吉野の金峯山に詣でる際にはどんな高貴な貴族でも粗末な格好で行くのが通例であったのに、宣孝は人より目立ちたい、御利益が得たいという一心でとてつもなく派手な格好で行ったというもの。こんな俗っぽい男がどうして紫式部と結婚できたのか、そのこと自体がとても不思議なのだが、「主人の仇は妻の私が討たなきゃ、女の意地が立たぬ」と怒りにまかせて書いたというのが説の主旨である。

以上、紹介した対抗意識説と報復説は二つとも清少納言への酷評が紫式部の私情から出たものであるとする点が共通している。しかし、これら二つの説には二人が所属した中宮彰子・皇后定子の対立関係という公的な理由は、ほぼ看過されており、あたかもキャリア・ウーマンとして働いていた彼女らの立ち位置は無視されているかのようである。

とはいえ、公的な理由が無視されるのはもっともな根拠があり、それは紫式部の酷評が書かれた年代が大きな根拠なっている。紫式部の酷評の直前には赤染衛門の評があり、

丹波の守の北の方をば、宮・殿などのわたりには、『匡衡衛門』とぞいひはべる

赤染衛門の夫である大江匡衡を「丹波の守」と記している。「御堂関白記」によれば彼が尾張守から丹波守に遷任されたのは寛弘七年（一〇一〇）三月三十日のことであり、赤染衛門の記述はそれ以降となる。清少納言の評は赤染衛門を受けてのものであるので、それが書かれたのは寛弘七年四月以降のこととなる。定子の崩御が長保二年（一〇〇〇）であり、すでに十年がたっている。客観的な情勢としては道長方の勝利は誰の目にも明らかであった。つまり、紫式部が清少納言に対する酷評を書いたときはすでに中関白家は過去の勢力であり、彼らを後ろ盾としていた女房の清少納言もまた同様であった。となれば、中関白家や清少納言の存在がもはやまったく政治的な意味を持たない以上、私的な理由からくるものと考えられてきたのである。

しかし、この通説に対して「ノン」と唱える説が新たに最近になって出て来た。以下、この説を紹介しつつ少しばかり検討を加えてみたい。

（二）

長保二年十二月十六日早朝、定子皇后は崩御した。その知らせは定子のサロンの明るさ・楽しさを良き思い出にしていた人々だけではなく、それまで彼女に対して「二

セ尼」とか「ニセ皇后」と冷ややかに見ていた人々にも大きな衝撃を与えた。

藤原行成は定子皇后の崩御に際して最も衝撃を受けた一人である。十六日朝、下人から定子崩御の一方を受けるや「聞き驚き、急ぎ参内し天皇の「皇后宮すでに遁逝す。甚だ悲し。」との悲嘆の声を間近で聞いた。その日の日記に書いたきわめて長い文章の末尾には「皇后、諱は定子」ではじまる彼女の略歴が書かれている。その文中で「ことありて出家、その後還俗。」と行成は書いている。当時の貴族たちが定子の還俗を認めようとしない中で、日記に残された「還俗」という語は行成の心情を微妙に反映したものであろう。

そもそも行成といえば長保二（一〇〇〇）年二月、彰子が中宮になるにあたっては「二后冊立（皇后と中宮を同時にたてる）」の理論的な根拠を道長に与えた当人である。このことにより道長の行成に対する好感度はグッとアップしたであろうが、行成にしてみれば蔵人頭（天皇の秘書室長ともいうべき職。天皇の周辺に起きたトラブルをうまく処理する役目も負っていた）としての仕事を遂行しただけのこと。内心ではわだかまりもあったのであろう。定子の死を受けて、それは同情と変化したのである。

一年後の定子の一周忌法要で彼は日記にこう記す。

> （皇后宮）大夫参らず。衰日（病気）と称する由。甚だ希有のこと。また宮司（皇后宮の役人）は喪服にて衆に交じはるべからず。しかるに亮なる明順朝臣、……装束にて諸大夫の座にあり。人みな目を側む。
>
> （「権記」長保三年十二月四日の条）

「大夫」とは皇后宮大夫のことで定子皇后の世話役の責任者であった人である。具体的には誰なのか分からないが、衰日（病気）と称して列席しないのを行成は「おかしい」といっている。また皇后宮の役人は定子皇后の法要であるので喪服を着し一般の参列者とは別の所にいるべきなのに、皇后職の次官である高階明順（定子の叔父である）は関わりのないような顔をして一般参列者の中に交じっている。さすがにこれはだめだろうと人々はみな彼らを横目でにらんだという。職務上、定子側であった人々はその死後自分らの政治的な立ち位置の転換を示すためにわざと露骨な行動を取らねばならなかったのだろう。とはいえ、法要の参列者は生前定子と親しかった人たちばかりであった。彼らのあからさまな行動は参列者の不快感をわきたたせたに違いない。行成も「ムッ」としたのは、この書きぶりから十分に伝わってくる。

そして、定子の死の三年後。定子の祥月命日に道長から呼び出された行成は先にそこにいた藤原斉信と夜を徹して語り合った。

> あるいは旧事を断じ、あるいは新意を述ぶ。談話の間に月はようやく西に及び、帰家す。

斉信は行成と同じく蔵人頭として定子及びその女房たちと親しく交わった人物である。同時に彰子の世話役の副長官である中宮職権大夫でもあった。この二人はともに定子への強い親近感と罪悪感とを持つ。偶然にも定子の命日にその二人が出会い語り合ったことは何であろうか。それは定子の思い出と定子死後の世間のありようであったとしても無理はないのではないか。

（三）

世間のありようといえば、定子死後にその親族が示した行動に対して不快感を持った者が一人いる。源俊賢である。

> 源宰相示されていはく、……故后宮に参る。しかるに外戚の高氏は皆ことごとく見えず。人心に似ず。
>
> （「権記」長保二年十二月十七日の条）

源宰相とは源俊賢のこと。彼が道長からの命を受け、定子の死の翌日に故后宮（定子が出産直後に亡くなった三条宮、つまり平生昌邸のこと）に行ってみると、定子の母方の親戚である高階氏の人たちが誰もいなかった。そのため彼は苛立ち「人心に似ず」、つまり「人でなし」と彼らを非難している。同じ日にもう一度俊賢は三条の宮に出向いた後、さらにこうも言っている。

> 后宮に参るといへども、宮司ならびに外戚親昵の者、相逢ふの人なし。一事を口入るるの輩もなし。なすべきの術なく、帰り参るなり。
>
> （「権記」長保二年十二月十七日の条）

皇后職の役人や身内・親近の者など、また定子死後の雑事を差配すべき者にも会えず、なす術もなく帰ったという。宮司や高階氏は今後のことを考えて定子の周辺から身を引こうとしたのであろう。定子の死の翌日である。それにしても掌を返すのが早い。このことに義憤を感じ、定子に深い同情を俊賢は寄せていたに違いない。

源俊賢の父親は藤原氏の陰謀によって起こされた安和の変で太宰権帥に左遷された左大臣源高明である。この事件は政変として重大な事件であったと同時に当然のことながら俊賢の心にも大きな傷を残したに違いない。『栄花物語』によれば源高明に対して次のような取り扱いがなされた。

> この左大臣殿に検非違使うち囲みて宣命読みののしりて『みかどを傾け奉らんと構ふ罪によりて、太宰権帥になして流しつかはす。』といふことを読みののし

る。今は位もなき定（じょう）なればと、網代車に乗せ奉りて、ただ行きに率て奉れば

この左大臣殿に対して検非違使たちは廻りを囲んで天皇の命令書である宣命を大声で読み上げて「朝廷を転覆させようと計画しているという罪によって太宰権師に任じて大宰府に流し送る」ということを大声で読み上げる。今は位も剥奪されてないと決まったからといって、網代車に乗せ申し上げてしゃにむにお連れ申し上げたので

と源高明は強引でかつ悪意に満ちた連行のされ方をした。菅原道真の左遷を思い起こさせる事件であったので、多くの見物人が押し寄せた。その中を車の側から離れず、しかも騎馬で行った少年がいた。俊賢である。彼は衆目にさらされながら、自分も自分らを指さす衆人の姿を直接目にしつつ行ったことになる。「栄花物語」が「物語」であることを考慮に入れても、今まで優勢であった勢力が失脚したとき、世の人々が新しい権力者に畏縮し媚びへつらうさまは俊賢自身がかつて敗北者の側に立って目撃し実体験したことなのだ。定子の死後、宮司や高階氏の行動にかつての記憶が呼び覚まされたことは十分にありうることである。「権記」十二月十七日の条に書き残された彼の感情は、そのように生々しいものであったのであったにちがいない。

（四）

さらにいえば定子の死で最も不安と恐れをいだいたのは藤原道長であったかも知れない。時の最高権力者であった道長は定子の死の夜、すさまじい怨霊に悩まされている。パニック状態になるほど恐怖におののいた道長であったが、その原因は十分すぎるほど身に覚えのあることであったのである。

たとえば、出産のために三条宮（「宮」といっても中級貴族であった前但馬守平生昌の三条にあった邸宅。定子皇后が出産前後にいたために「宮」といわれた。そのひどさは「大進生昌が家に」で清少納言が散々に書いている）に定子皇后が行啓したときも貴族たちが定子に同行しないように道長は妨害した。その結果、ほとんどの貴族は動くことはなく定子の行啓は前代未聞なほどの寂しいものであった。また、こうした嫌がらせだけでなく定子を経済的に追いつめるようなことも道長はやっていたに違いない。

それにしても、である。平安京の貴族たちは権力者である道長になぜこんなにも弱いのか。貴族といえば広大な荘園（領地）を持った人たちであり、嫌ならさっさと領地に帰って暮らしたらいいのに、なぜか。それは大部分の貴族たちが都から離れられず、有力な貴族に頼らなくては生きていけない情けない存在であったからである。

平安時代の官人貴族（朝廷に仕えた貴族）は在地（地方の土地）から完全に切り離されて都市に住む官人と化して朝廷への従属性を強めていた。彼らの生活は国家から出された封禄（位階・官職に応じた給与）に依存していた。貴族自身が地方に領地を持ち自分たちの生活を自らの力のみでなしえた西欧の貴族とはまったく違うのである。だから、都市の生活に嫌気がさして田舎に帰ろうとして「帰りなんいざ、田園まさに蕪（あ）れんとする。胡（なん）ぞ帰らざる」などとうそぶいて都市から離れることはまず無理なことであった。

しかし、そうした彼らの生活を支えた朝廷からの生活物資の支給も国家財政収入の減少にともない乏しくなっていく。十世紀中期になると特定官職や一部特権者はともかくも中下級官人の禄制（生活物資の支給システム）は解体・縮小し、彼らは収益が保証されている役所や有力な貴族に属して生きていくこととなる。

もちろん、朝廷は「ない袖はふれない」状態である。そうなると役所では「賄賂」が公然と認められていくこととなる。そこで働く中下級官人の生活を保障するため、便宜的に作られた新たなる収益源である。また、没収された盗品が検非違使たちによって私物化されることが当たり前のようになっていく。検非違使たちの収益源となったのである。

また、役所の運営費用では、その長官がその費用の一部を私的に供出した。その見返りとして長官は役所の官人や役所内の物資を私的に動員・流用もできた。そのため官庁の機能と長官の家産組織が一体化していった。検非違使の役所は別当（長官）となった上級貴族の邸宅にあることが普通であったのである。

一方で当時の官人は権門（この場合は有力な上級貴族）に仕える者も多かった。権門の家司・家人となって主人に仕え主家から利益や保護を受けるためである。

一例をあげれば大外記（だいげき）（朝廷の書記官）であった菅野敦頼は藤原実資の家司であった。彼は実資の推挙により受領に補任されたが、見返りとして叙位の清書を発表前にも関わらず実資に密かに見せていた。要するにスパイである。

十一世紀初め、政治運営にとって重要なポストや収入の多いポストには権門諸家（権力を持った上級貴族）が家司や家人をそれらのポストに送り込んでいた。蔵人、検非違使、大国の受領には摂関家を中心とした権門諸家の家司・家人が多く推挙・補任されていたのである。自然、そうしたポストにいる官人に対しては権門が大きな影響力を持ちことになる。こうした状況下の官人は職務を遂行しながら自己の利益を追求し、収入や保護を得る見返りに官司の長官や主家への私的な奉仕に励

むこととなった。公私混同こそが当時の「公務」そのものだったのである。

また、権力者の意向に応じる代わりに利益を得るのは公卿などの上級官人も同様であった。

上級官人は家司や家人のポストを世話しなければならなかったが、そのポストを得るためには人事権を握る藤原道長のような有力な上級貴族に頼らねばならなかった。

また、公卿などの上級官人の主たる収入は封戸（寺社や上級貴族に支給された戸のこと。戸からあげられた年貢が収入となるが国司を経て納入された）であったが、それは受領の動向に左右されており、収入は決して安定したものではなかった。封戸からの封物（封戸から納入すべき物）を収める相手が摂関家であれば受領は間違いなく封物を収めたが、そうでない場合は納入を怠りがちであった。「栄花物語」には伊周失脚後に中宮定子が「御封など、すがすがしうわきまへ申す人もなし（封戸からの納入物などを何の滞りもないように心がけ納入する人もいない）」という状態になったとあるのもこのためである。

人事権を握る有力貴族（道長など）の意向を無視できない。そのことは公卿たちも同じことであり、彼らも道長には追従せざるをえないのである。在地から切り離され封録への依存を強めた貴族たちにとって人事権を握っている有力貴族（道長など）から疎外されることは収入の道を閉ざされてしまうことを意味するからであった。

さて、大急ぎで話を元にもどすと、その道長は定子皇后が崩御した当日とんでもない目にあっていた。皇后の死を聞いた一条天皇は即座に道長を呼び出した。だが、彼は参内など思いもよらぬ状態であった。女房の一人に怨霊が取り憑いて道長を襲い、彼は逃げ回って疲れ果てていたというのだ。怨霊は憤怒の表情で髪を逆立て、大声をたてながらかかってきたという。必死の思いで怨霊の左右の手をつかみ押さえ込んだ道長は考えた。怨霊の正体は誰だ。長兄の道隆、次兄の道兼か。いや、それとも。そこへ定子の死の知らせである。彼は深く恐れたに違いない。生前あれほど追いつめ、いじめた定子が怨霊となったのか。このことは行成の日記「権記」に道長から聞いた話として書かれてはいるが、残念ながら本人の日記「御堂関白日記」には記載がない。いや、そもそも「御堂関白日記」には全体的に怨霊・呪詛について道長自身が書き記すことはあまりないのである。平安時代の貴族で最も人から恨まれ呪詛されることの多かった道長である。彼は誰よりも呪詛・怨霊を恐れていた。怨霊・呪詛されたことへの恐怖が書かれていないのは、彼の豪胆さを示すというよりも恨まれていることを絶えず意識していることから来る恐怖心によるものであったのかもしれない。

そして、さらに道長を驚愕させることが起きる。定子の四十九日の直前、道長の妻の甥で彼ら夫婦の養子となっていた源成信が右大臣藤原顕光の嫡男重家とともに三井寺で出家したのである。左大臣道長と右大臣顕光という当時の政界トップの二人が三井寺に駆けつけた時にはすでに遅く、親たちは天を仰いで嘆いたという。しかし、世間の人は出家した二人に寛容であった。この事件を知った直後に公任が行成に詠み送った歌がある。

思ひ知る　人もありける　世の中を
　いつをいつとて　過ぐすなるらん

世の無常を思い知り出家する人もいる世なのに、この私はいつ思い知る時が来ると思って、グズグズとこの世を生きているのだろう

公任は二人の出家を非難することなく、むしろ共感を抱いて見ていたのである。もちろん、定子皇后に対する同情と懐かしさがその思いの底にあったのは言うまでもない。

こうした人々の思いのためか道長を苦しめた正体不明の怨霊は菅原道真の怨霊のように「祟(たた)り神」とされることはなかった。菅原道真、藤原元方など多くの怨霊と化した人々を恐れてきた人々にとって道長にいじめ抜かれた定子が怨霊となるのでは、という恐怖を感じるのは自然なこと出会ったに違いない。しかし、定子はついに怨霊として恐れられることはなかった。定子への同情と何よりも笑い声で包まれていた明るく楽しいサロンへの懐かしい思いの方が彼女への恐れよりもはるかに上回っていたからである。そして、その思いはいつまでも人々の心から消えなかったのである。

（五）

さて、少し長くなったが、前項までが紫式部による清少納言への酷評の説の第一の前提である。いつまでも消えない定子への同情とその明るさへの思慕。しかし、これだけでは紫式部が怒りを発するにはまだまだである。

次の問題は「枕草子」の成立に関わる問題である。

現在、「枕草子」の専門的な研究者は「絶滅危惧種」と言われているらしい。というのも「枕草子」の専門的研究書は同時代に書かれた「源氏物語」と比べればまったく微々たるものといわざるを得ないからである。それは大学の図書館にでも行けばすぐに分かる。日本文学のコーナーに大型書棚の三つから四つくらい「源氏物語」の研究書がそれこそ目一杯ぎっしりと詰め込まれて並んでいる。「枕草子」のそれは書棚の一～二段もあるだろうか。ともかく有名な作品のわりに寂しい状態なのである。思うに、大きな理由の一つ

として「枕草子」には異本が多い。

「枕草子」の伝本はおおまかにいえば四種類あり、その伝本ごとに章段の並び方や本文が甚だしく異なっている。たとえば、筆者の手元にある岩波文庫本と角川文庫本とでは章段の並び方はまったく違う。

また本文でいえば「春はあけぼの……」は誰もが知る冒頭の文章だが、これが伝本ごとに異なる。仮名を少し間違ったといったレベルの違いではなく、本文のあちこちが違うのである。一例をあげてみる。

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、……秋は夕暮。夕日のさして山の端いとちかうなりたるに……

（三巻本系の伝本）

これが多くの教科書にある冒頭の文である。これが違う伝本では次のようになる。

春はあけぼの。空はいたくかすみたるに、やうやうしろくなりゆくやまぎはの……秋はゆふぐれ。ゆふひのきはやかにさして山のはいとちかくなりたるに、……

（前田家本の伝本）

これらが写し間違いという程度の違いであるのか、どうか。こうした異同が「枕草子」の随所にある。

さらに「枕草子」は「をかしの文学」などといわれるが、それでは日記的な内容の部分はどう扱うのか。中世の随筆のように作品の全体を「無常の文学」の一語ですませることなどはとてもできない。「三〇一段の記事は、その間に連絡もなく統一もなく、ただ思うがままに書いてあるだけ」という批評や「枕草子は、文章の何たるかを知らない女のおしゃべりだ」という批評が日本古典文学研究者から出たりするのはむりからぬことかもしれない。

そのような「枕草子」になってしまったのは作者である清少納言にも責任はある。今までの研究者の意見を総合すると、どうも清少納言は「枕草子」を全編完成した形で読者に提供したのではなさそうである。つまり、バラバラと書いたものから、順次、読者に手渡し、それが次々と写されていったらしい。晩年、全体的に整理を付けて娘の小馬命婦に預けたという説もあるのだが、そうしたことをする以前にさまざまなテキストが世間に存在したことは想像される。

では、どんなふうに書いていったのか。もう少し検討を加えてみたいが、そのヒントになるようなことが「枕草子」のなかにわずかであるが書かれている。

最も有名な部分は末尾にある作者の跋文とおぼしき文章である。その文章によると、内大臣伊周が中宮定子に冊子にした紙を献上した。定子はこの冊子を清少納言に与え、清少納言はこの冊子に「世の中にをかしきこと、人のめでたしなど思ふべきなほ選りいでて（世の中のおもしろいこと、人がすばらしいと思うに違いないことを厳選して）」書いていった。すると、ある日のこと左中将源経房が伊勢守のときに清少納言の私宅に来て机上にあった冊子を見つけ無断で持ち出した。それ以来、世間に出回り評判になったというのである。伊周が内大臣であったのは長徳二年（九九六）まで。また源経房が伊勢守であったのは長徳元年と二年の間。となると経房の無断持ち出し事件は長徳元年か二年のこととなる。すでに跋文の中からも読み手を想定して書いているのは明かであるが、「くらげの骨」で有名な「中納言参り給ひて」の末尾でも

かやうのことこそは、かたはらいたきことのうちに入れつべけれど、『一つなおとしそ』といへば、いかがはせむ

こんな自慢話めいた話は、はた迷惑で閉口するといったことの中にでも入れるべきだろうが、「一言も書き落とすな」というので、仕方なく書きつけておく。

とあるように、読者の反応を聞き入れつつ作者が執筆しているらしい記述からも察せられる。

また、日記的な章段は定子死後まもなくから書かれ流布されはじめた可能性が高い。いや、それどころか紫式部が「紫式部日記」に清少納言への酷評を書いたのが先に述べたように寛弘七年（一〇一〇）だとすると、その少し前、寛弘六年に清少納言が執筆したと考えられる章段がある。一〇二段「二月つごもりのころ」である。

ある年の二月の末ごろ、清少納言は参議の公任から「すこし春ある心地すれ」の上の句を付けるようにという手紙を手にする。公任と同じ場には俊賢や実成という当代の有名人がいるらしい。定子皇后に相談したいが、皇后は天皇とお休みになってしまわれた。しかたなく白居易の詩を踏まえて「空寒み花にまがへて散る雪に」と恐る恐る返事をすると、後になって左兵衛督、当時は中将であった藤原実成から「参議と俊賢が絶賛して典内侍に推薦したい、と評された」とうかがったという内容である。

定子が生きていたのは長保二年（一〇〇〇）十二月十六日までであり、公任が参議であったのは正暦三年（九九二）から長保三年（一〇〇一）、俊賢が参議であったのは長徳元年（九九五）から長保六年（一〇〇四）までである。そして、問題となるのは藤原実成である。彼が右近衛中将であったのは長徳四年（九九八）から寛弘五年（一〇〇八）までであり、寛弘六年に左兵衛督となる。とすれば清少納言が公任から手紙をもらったのは長

保元年（九九五）か長保二年のこととなる。と同時に「二月つごもりのころ」が書かれたのは寛弘六年以降ということになる。

　定子の死後、十年近くたっても清少納言はまだ「枕草子」を書き続けていたのである。そして、それは書くそばから次々と人々の間に流布していったらしい。これが二番目の前提である。

（六）

　さて、字数もだいぶオーバーしているのでゴールを急がねばならない。今まであげた二つの前提から次のことがいえる。

　紫式部が寛弘七年に「紫式部日記」で清少納言を酷評したとき定子や中関白家は現実の政治的な勢力としてはとっくの昔に過去のものであった。しかし、人々の心の中には理想的な中宮・皇后として定子の姿はずっと存在していた。そして、それをさらに助長するような「枕草子」の日記的章段は、紫式部が酷評を書く前年にも執筆されている。執筆と同時に世間に広がったとしても寛弘七年まで一年しかない。広く流布するまでに少しばかり時間がかかったとすれば、その時間の隙間はより狭まる。この段の中で一方では一条天皇が定子と仲良くお休みになる場面が書かれ、また、その一方では清少納言が公任・俊賢・実成と渡り合って漢才・機知を賞讃される様が書かれている。寛弘七年現在、天皇と彰子には二人の皇子がおり、公任らも道長に身をすり寄せている存在である。だが、「二月つごもりのころ」の段は十年ほどの間に大きく変化してしまった時代を振り返らせ、同時に人々の心に定子の記憶を復活させたにちがいない。軽やかで明るく楽しい定子のサロンの思い出は鮮やかによみがえったことだろう。そして、それはたやすく現在の彰子のサロンに対する批判となっていく。

　当然のことながら彰子は中宮という地位からいっても定子と常に比較されることは避けられない。定子が死んで十年がたっても彼女を理想的な后妃として記憶しているならば、それを助長している「枕草子」に対してどう思ったか。彰子はともかく彼女の周りにいる女房たちはかなり感情的になったであろう。道長が娘のために集めたトップレベルの良家出身の女房たちである。実務的なことはまったくだめだが、プライドだけは高い。

　そこで紫式部の登場である。彼女の自発的な動きなのか周りの女房からせかされてのことかは分からぬ。理想的な皇后としての定子の美しいイメージ、そしてそれを促す清少納言の「枕草子」。それは彰子を中心とした後宮世界をつくる上で大きな障害であるのは間違いない。彰子付きの女房であった紫式部は、この障害を徹底的に除去しようと清少納言および「枕草子」を否定し、それによって世間がもっていた定子への懐古の思いを粉砕しようとした、というのが新説の概要である。「政敵打倒説」とでもいおうか。

　さて、ここまで延々と書いてきて誠に言い出しにくいのだが、この新説について筆者は「これもアリかな」とは思いつつ「その通りだ」と膝を打って賛成する、という気にはなれないのである。やはり「清少納言なんて何さ。だいッきらい」といった感情論が捨てきれない。大きな理由は酷評に書かれている「真名書き散らし」という言葉である。漢詩文の世界によせる紫式部の思いは強くてかつ複雑である。これについては次回述べることにする。

【おわび】

　「オクラの山たより(16)」で文中に二カ所の誤りがあったので訂正します。「老境にいまだまったく慣れぬ初老」の筆者のこと。寛容の心を以てご容赦ください。筆者の気づいた以外に誤りがまだまだありそうなのですが、まだ尻の青い老人にありがちなミスと御勘弁ください。

1　冒頭の部分
「もう今までは」→「今では」

2　【補足】の二段落目の最初
「墓石に彫られた円形の穴には徳足の火葬骨が納められた骨蔵器には」→「墓石に彫られた円形の穴には徳足の火葬骨を納めた骨蔵器があり、そこには」

普通の話、大団円

大江　雅兎

　いつまでも同じ話題を引っ張りすぎて気が引けるが、あと一回だけ普通談義を続ける。「普通」に限らず、言葉の意味はそれを真っ正面から検討すると、わけのわからない泥沼へと引き込まれる。一つの局面で通用した説明が、文脈を変えた他のケースでは据わりが悪くなるなどはざらにある話で、使われ方が多様で多くの人が気軽に口にする言葉ほどその傾向は著しい。言葉の意味が課題なのだからといって辞書を開こうものなら、①②③④……といくつもの説明を突きつけられるのが普通だ（この「普通」は〝多くの場合で見られる傾向〟のこと）。そんな時は、世の中で実際に使われている熟語的用法の内容を具体化させることで活路が開けてくることもある。普通という言葉であれば、たとえば普通郵便とは何かというところから始めて、修飾語として用いられる普通の意味合いを絞り込むといった具合である。

　最初の一例で挙げた普通郵便のケースは比較的わかりやすい。というのは、制度的に明示されている速達や書留との対義語として用いられているからである。すなわち、割り増し料金を支払うことで利用できるオプションサービスを付けない配送方法が普通郵便で、普通とはオプションなしの状態を指すことになる。こ

れを平易に言い換えると、特別でない状態というぐらいでいいだろう。

一方、普通教育とかの場合であれば、すこしばかり面倒になる。一般的には小中学校での義務教育に高等学校の普通課程を加えた授業を指すようだが、辞書的にかみ砕くと「人間として、または一般社会人として必要となる知識や能力を養うために行われる教育」となる。辞書的説明は明快だが「人間として、または一般社会人として必要となる知識や能力」が何を指すのかは人によって理解が異なる。したがって漠然とした内容を他の漠然とした言い回しで置き換えているに過ぎず、十分な説明とは言えない。それでも数式のように一切の曖昧さを排除することは不可能と割り切ることも必要なので「社会生活を営むうえで比較的多くの人が必要と認める知識や能力の教育」といった玉虫色的な合意に落としどころを求めることになる。そして、こうした形でまとめた場合は、普通の意味は、多くの人がそれを妥当と認める内容といった辺りとなる。

これらに比べて、さらに話がややこしくなるのが普通選挙というときの普通だろう。普通選挙とは地位や財産による制限を設けずに選挙権を付与する制度を指すが、それに普通という語を冠することが適切なのかどうかという次元での議論も生まれてくる。歴史的な流れでいうのなら、近代の選挙制度は財産による制限を排除することが最初の選挙権拡大であり、次に性別による制限排除が行われて現代に至っている。前者を普通選挙と呼び、後者を平等選挙と呼んで区別する場合もあり、その呼び名に従えば一定の年齢に達したすべての国民が投票権を持つ制度は普通平等選挙である。

ここで問題にするのは、普通選挙が実現された段階での認識だが、財産による制限がない状態を普通と呼ぶのなら、それまでの状態が特別や特殊であったのだろうか。選挙権の獲得はヨーロッパ市民革命の果実であり、家格や身分に関係なく選挙が行われるようになった段階でも一定の到達点だったはずである。その段階で、新制度に特別や特殊という眼差しが向けられていたのかは疑問である。むしろ財産による制限の撤廃が論じられるようになった段階で新たな形での普通が提唱されるようになったと見るべきだろう。歴史の問題と日常語の問題を一緒くたに論じるのでややこしくなるのだとすれば、歴史用語である普通選挙の普通については、その言葉がどの時点で用いられるようになったのかなどの歴史的文脈を整理して、一般語彙とは異なる扱いが必要になる。

ところで普通選挙を英語で言うとすれば、universal election または popular election になるらしい。両方とも財産による制限だけでなく、性別による制限も撤廃された普通平等選挙のことだが、肝は universal または popular が普通選挙の普通に該当しており、普通の訳語として一般的な normal ではない点がある。そうすると、普通選挙なる日本語表現の問題ということになるのかも知れない。

ちなみに、ここに登場する universal という単語だが、これはすべてに適用される状態を表す。それを用いて一連の普通談義の発端となった「普通の恋」を、試しに universal love に置き換えてみると、実は大変なことになる。恋愛の対象がすべてであるわけだから、男女の両刀づかいなのは言うまでもなく、ヒトもケモノもオールウェルカムということになって、サド侯爵も真っ青、normal love とはもっとも遠いところにある性的嗜好になってしまうのである。

閑話休題、普通という言葉の意味を考えるにあたって熟語からアプローチをしてみたのだが、結果としては、わかりやすくなる場合もあればそうでない場合もあり、時には言葉の適否も検討せねばならないケースもあることが見えてきた。そうすると、次の試みとして考えられるのは、normal／universal／popular の別に着目するような具合で、普通という言葉と概念的に親近性がありそうな言葉と並べてみて、その違いを検討してみることである。一般、標準、普遍あたりがそのターゲットだろうか。

一般は、この文章でもすでに何度も用いているが、般には平たいという意味があり、一様に平たいさまを表す。そこから、突出した部分つまり特徴がないことをいう時の普通と重なる。標準はばらつきがある中での中央付近に置かれる目安を意味しており、平均的というニュアンスでの普通である。普遍はどこにでもある様子を表すので、すべてに当てはまるという意味、したがって先に取り上げた universal に近い言葉である。このように、一般、標準、普遍の間でも意味の違いがあり、普通はそれぞれに対して重なるところもあれば、重ならないところもある厄介な言葉なのである。結局のところ、実際に使われる具体的な局面で、曖昧な全体像のどの部分が強調されているかなのだろう。

ところで、少し話がずれてしまうのだが、普遍という言葉を登場させた関係から、普遍論争なるものについて触れてみたい。もっとも正直に言うと、意味するところがよく分からない議論でもある。突き詰めれば、普遍なるものは存在するのかという問いらしく、目の前に厳然とした形で存在する個物に対して、それを包含する上位概念である普遍が存在するのか否か、という形で行われる。そうしたものだから、議論のための議論というか、抽象思考の極みのように思えてならないのである。ただ、普通をめぐる話のなかで、普通なるものはそれ自体があらかじめ存在しているわけではなく、具体的なある対象を普通でないと認識した時

点で形を見せ始めるということを、早い段階で書いたはずである。あるいは自らを普通と称して大多数に溶け込ませる態度は、得てして宗教的安寧を求める心に近いとも書いた。そして今回、普通と普遍には相通じる部分もあるのなら、一連の無駄話はもしかすると、神の実在を説くに至る普遍論争の焼き直しをやっていたのかも知れない。

何はともあれ、普通をめぐってはどこまでやっても話を切り上げる節目は訪れてくれない。もとより結論めいた何かがある話題でもないのだから、半端かつ強引ながらも、今回で幕引きにする。

埋め草

前回は平成が終わった後の、次の元号予想であれこれ遊んでみた。そのなかでいくつか前提条件を並べたのだが、その後、関連資料を調べてみると、いくつか遺漏があったようだ。

まず、遺漏その一。元号に用いられる漢字には、おおよそながらの範囲がある気配だ。もっとも、この言い方は正確ではなく、過去に元号で用いられた漢字を並べると限られた範囲に収束する傾向があるとした方がよい。

具体的には、永（29、数字は回数、以下同じ）、元（27）、天（27）、治（21）、応（20）といった具合で、特定の漢字を中心に反復性が見られるというのである。とはいえ昭和の昭や平成の成は、使用履歴のない初めての漢字だったそうだ。したがって、この単漢字レベルでの反復使用というのは、絶対的なルールではないが一応の目安程度には意識しておいた方がよさそうである。ちなみに、前回、いい加減に並べた私案のうち、上下の両方とも十回を越えて使われていたのは安仁だけで、道光に至っては両方とも使用実績ゼロである。

次に遺漏その二。実はこれは非常に重要な情報と言ってもよいのだが、かつて候補に挙がりながら採用されなかったものが、機会を改めて採用されることが少なくないということである。いわゆる「未採用元号」のことで、近いところでは幕末の文久・慶應、あるいは近現代の明治・大正・平成はそれに当たる。この未採用元号に関しては、森鴎外が資料（「元号考」、慶應まで）を残しており、過去に挙がった候補を一覧することができる。たとえば慶應に決まった一八六五年の改元では、寿徳、明順、明建、建平、宝観、寛禄、平成など四十一の候補が挙がり、その中から慶應が選ばれている。同じく一八六四年の改元では明治ほか二十四の候補から元治が採用され、その前は十八候補から文久が選ばれている。なお明治は、文久が選ばれた時にも候補になっているので、未採用元号は何度でもノミネート可のようだ（明治は十一回、大正と慶應はそれぞれ五回ずつ候補に挙がっているらしい）。こうしたことを情報として入れておくと、漢籍からランダムに抽出したものよりも、未採用元号の方が可能性が高いと言えるのかも知れない。ちなみに私案の中には未採用元号はないが、悠天については上下が逆の天悠が候補に挙がったことがある。

さらにもう一つ加えるなら、出典は漢籍が絶対条件ではないとの話である。これは意味するところがよく分からないのだが、和書でもしかるべき文言なら出典となるということなのだろう。とは言っても漢字を並べるのだから、仮名文資料ではどうにもならないし、日本書紀だの王朝漢詩文だの五山詩だのを持ち出しても、文言の出典となる漢籍があるはずなので、結局のところは中国の資料になってしまうのではないだろうか。江戸漢文や明治漢文ぐらいになると独創的に思える用字もまま見られるので、四書五経を中心とした古典漢籍に典拠がないものをあえて探すことは、できなくはないのだろうが、とうてい有意義な作業とは思えない。

さて以上のような情報を新たに加えたうえで、再度、検討をするとすれば、前回に挙げた私案のうち、道光と立成は可能性が限りなくゼロに近い。他の三つのうち、安仁は上下とも頻出漢字なので保留にしてもいいが、万志と悠天はかなり難しい。お愛想程度の弁護を付けるにしても、万志の万は既出四回の実績があり、悠天は前述したとおり未採用元号の天悠に似ているのが救い、といったあたりが関の山である。というわけで、改めて候補を探すことになるのだが、まずは未採用元号の中から気になるものということで、

和平：易経「聖人感人心、而天下和平（聖人は人心に感じ、天下和平たり）」

を挙げておく。きわめて一般的な熟語のような気もするが、現代的な視点でも理想を表す文言といえるし、分かりやすく書きやすい、それにWで始まる点は明治以降の元号との混同は起こらない。

ちなみに、和平の和は、過去の元号では十九回、平は十二回ほど使われていて頻出の部類に入る。また二字を組み合わせた和平が候補に挙がったのは、江戸期以降を調べた範囲では、寛政が採用された一七八九年を最初に六回ばかり確認できる。平成がそうだったように、落選履歴が少なくても採用されることもあるので、ノミネート回数は関係ないといえばそれまでだが、七度めの挑戦で陽の目を見るとすれば、それはそれでドラマチックである。

Ⓒ

連載　女９０年の軌跡　眞糀さん

いつか来る道

昭和の最後を飾る歌、美空ひばりのこの歌、

「川の流れのように」

一九八九年一月一一日、わずか七日の昭和六四年が終わり、平成元年の四日目に出た歌である。

知らず　知らずに歩いて来た
細く長いこの道
振り返れば　はるか遠く

このひばり節に手を引かれて平成へと歩んできた。当時誰もが新鮮に感じたその元号も役を終える日が決まったらしい。皇族会議で天皇陛下の退位が示された。

二〇一九年、平成三〇年四月三〇日に退位され五月一日に皇太子さまが即位される。

悲惨な戦争があった。奇跡の経済成長があった。昭和がそうであったように、平成の見送り方も、人それぞれに違いない。今日を含めこの時代もあと何日？…。やや感傷にひたり、歌の続きを浮かべてしまった。

でこぼこ道や　曲がりくねった道
地図にさえない、それも又人生

元号の変わる頃、次はどんなよき歌が流れているのだろうか

現に自分の姿さえ遠くなり
それも人生か…

振りかえる

現世では私たち一人で泣いて、一人で苦しんでいるように思うけれど、そうではないことを知る。

夢を見た、主と並んで歩き、二人の足跡を残して、夢の中で、その足跡は、私の生きてる一日一日を示しているのだ。

立ち止まって後を向くと、そこに主の笑顔があった。

はじめて見た、あのうれしそうな顔。なで、なで、ところがそのことに気付き、二人の足跡ではなく、一人の足跡しかなかった。

私の生涯が走馬灯のように思い浮かぶ。

苦もんの日、利己主義の日、試練の日、やりきれない日、自分に愛想が尽きた日。

そこで主に向かって文句を言った。

親しき仲にも礼儀があり、友達だけでなく夫婦や親子の間でも、自分というものを知った時、甘えてはいけない。

いくつになっても精神のおしゃれが大切。

俳句

土田　裕

ベランダの手すり余さず布団干す
大寒や予想外れの空模様
水温む土の疲れを癒やすごと
草萌ゆる幼児の靴の玩具めく
白梅や開花を前に逝きし友

影山武司

いらぬもの捨つる覚悟や寒の入
小気味よき二つ返事や寒卵
手鏡に映す寒紅一文字
誰もゐぬ家の広さや風邪籠
山道に声の途絶えし蜜柑山
隆々と冬青空へ御神木
冬木の芽壮士の墓の空覆ひ
風やさし一輪のみの寒桜

編集後記

一月は例年になく充実した月でした。武奈ヶ岳で冬山を楽しみ、武庫川新春ロードレースを走り、お伊勢参りもできました。

一番うれしかったのは、本誌にも時々寄稿してくれている熊さんが南丹市の市議会議員選挙に立候補されたことです。熊さんこと「麻田やすし」さんは、私の学生時代からの友人であり山友達です。

彼は、私が難病に侵され苦しんでいる時に六甲登山のすばらしさを身をもって教えてくれました。そのかいあって私の体力も奇跡的に回復しました。

彼のすばらしさは、粘っこい性格です。どんなに苦しい登りでも黙々と歩き続け弱音を言わない。決してあきらめない性格です。

へとへとに疲れている時でも、彼は周りの人に細やかな気遣いを忘れません。だからこそ、十年余りもＷＡＯ亀岡の山岳会の会長を務めているのだと思います。

そんな彼も六七歳ですから、体力の維持には努力しています。何をするにも先ずは体力ですから。三月には恒例の六甲山全縦走大会に彼とその仲間と参加します。